二〇一八年三月九日

雛壇の眼鏡は客の忘れ物　うつぎ
馬鈴薯植う触りし土の温かし　三刀
春泥の乾かんとする象の尻　宏虎
陽春や旅のさそひに気もそぞろ　みどり
高枝より春光もるる木立かな　みどり
揚雲雀神の御山を越えんとす　明日香
渡し舟行き交ふ土手の花菜風　智恵子

二〇一八年三月八日

墓の母へと報告す卒業子　治男
貝寄風や坂の神戸に住み古りて　たか子
一人居の気まま春眠はばからず　はく子
ハングルも英語も混じる受験絵馬　さつき
春寒や回覧版の雨に濡れ　満天

二〇一八年三月七日

せせらぎを聞くやに出でし蕗の薹　さつき
ぴかぴかにトイレを磨き卒業す　よし女
繕はぬ古びが値打ち雛調度　うつぎ
捻れたる老幹なれど梅香る　さつき
登校子見守る黄旗風光る　智恵子
五感もて旬を楽しも木の芽和　宏虎
助手席はゆりかご春眠避け難し　はく子

二〇一八年三月六日

トンネルを抜けるや否や山笑ふ　さつき
雛の間行儀良き子となりにけり　よう子
曲水の宴模したる庭の雛　なつき
雨晴れて膨るるごとき春の山　満天

二〇一八年三月五日

馬酔木咲く万葉歌碑の並ぶ丘　やよい
歪みたる玻璃戸に梅の花滲む　ぽんこ
風花のスクランブルす交差点　愛正
海峡を見下ろす宮の山椿　うつぎ
笏なくて手持ち無沙汰や古雛　明日香
合格の祈願の絵馬に風光る　菜々
楼門の奥処を埋む梅白し　よう子
早朝の眠り断ち切る春の雷　三刀

二〇一八年三月四日

人見知りせる子を泣かす雛の客　なつき
一句欲る淀の堤の春風裡　菜々
顔寄せて盆梅の香を確かむる　よう子
古墳へと走り根の道踏青す　やよい

二〇一八年三月三日

糶果てし余韻埠頭の春風裡　せいじ
楼門の篇額仰ぐ梅の寺　よう子
庭池の反り橋に立つ内裏雛　うつぎ